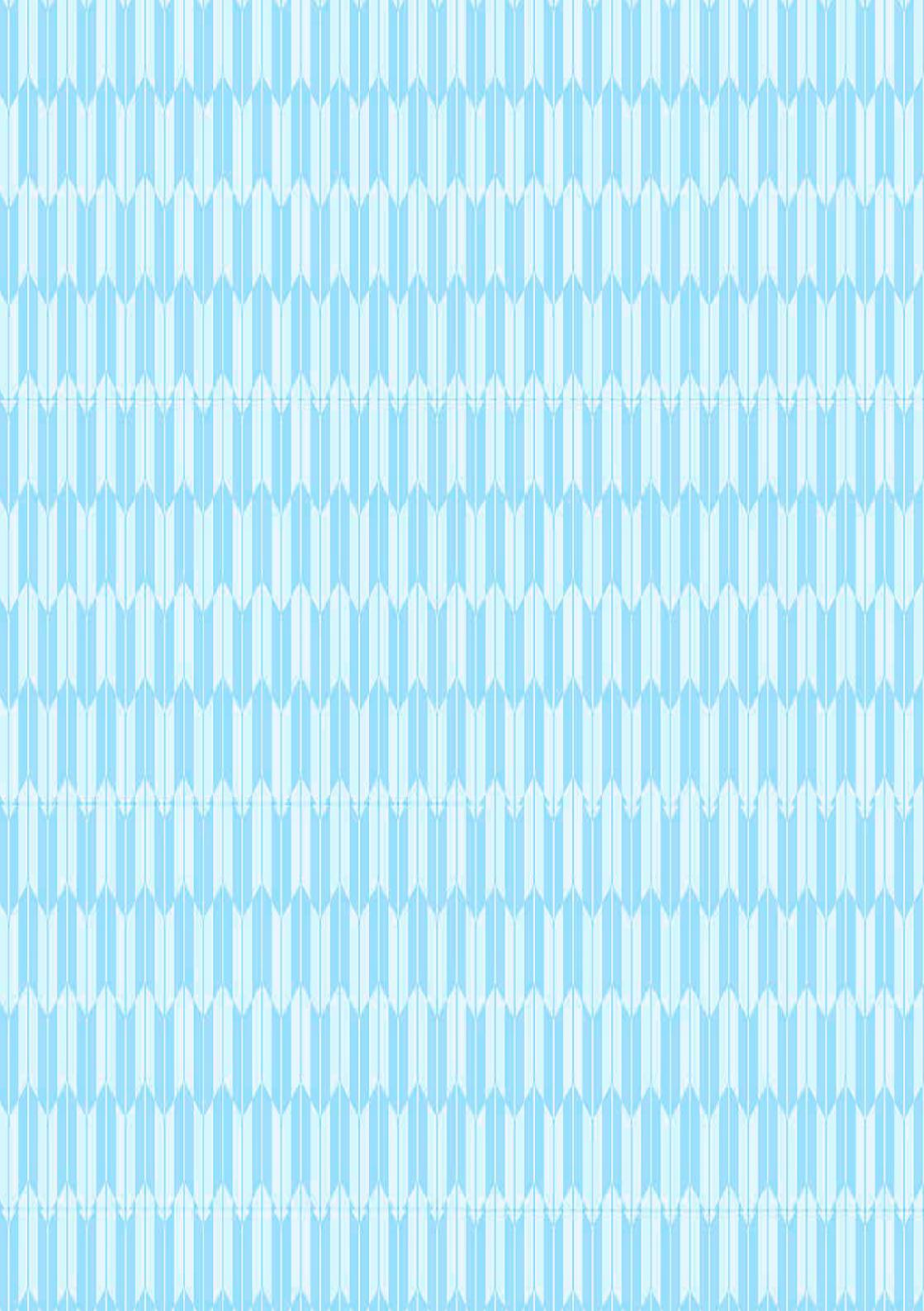


あさ 11

2025



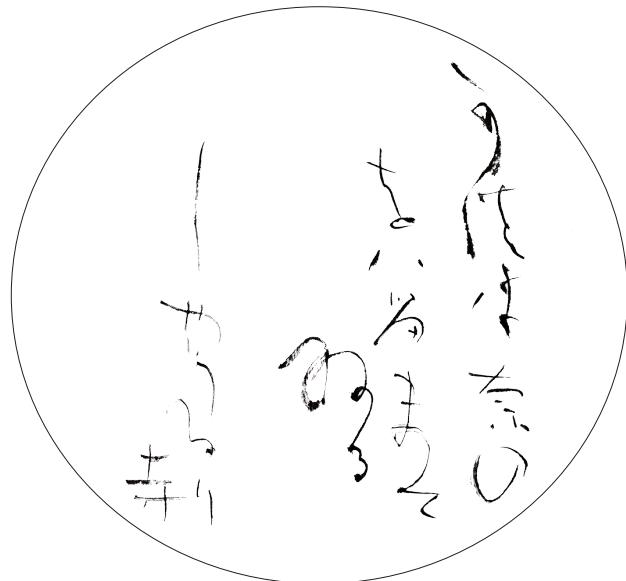
撮影：不寢



蠍 蝻 蟻 蝻



風花のをはるまである淨瑠璃寺 竹櫻



あそ

十一月集

坐・誄

佐藤

竹僊

夏の木となつてしまへり古祠

てのひらを開くと蓮の花のやう

朝顔をちよつとのぞきてしじみてふ

朝顔の花の裳裾の亂るる秋

ゲームの牛に餌をあげねば鉢朝顔



ゆく水に脚立つところ通し鴨

暗幕の裡のやうなる蟬の森

落蟬の周りに塵のあつまるる

白玉や長男にして父母遺る

旱でも線状降水帶でも休耕田

父に名を強く呼ばれし夏休

初秋や足うごかすと手がうごく

スカートよりズボン複雑雛まつり



栗飯

長崎桂子

夜の帳おり風出でしすこし秋
稻刈神事伊勢の宮神官の笑み
いちにちに黄金色ます稻穂なり
散歩道きのふより今黄金波
夕飯や秋しらす丂にして
秋野菜あふるる店頭迷ひをり
郊外に住み秋たのし友は笑む
肘かくしロングスカート秋日傘
感謝してこよひ栗飯いただけり



とんぼ翔ぶ

森 なほ子

とんぼ翔ぶ帰ることなき水の上
氷菓舐め訊きたきことはきかぬまま
ピッチャリーは阿修羅像似や汗もなく
地下道に束の間炎暑逃れたる
昔子らの舌甘くして一位の実
溝蕎麦の咲くかの水辺今も在りや
伸びるだけ伸びて溝蕎麦凭れあふ
摘めるだけつんでもいいよ溝蕎麦なら
溝蕎麦の花好きだつた今も好き



九月尽

赤座典子

繰り返し「星に願いを」秋の宵
秋果届く「信濃毎日」詰められて
ハルウララ挑み続けて秋の声

秋の雷屋根の真上に四半刻

「深夜特急」読みし熱量秋の薔薇

秋晴れて子と観劇の誕生日

退院を待ちし土産の栗羊羹

やうやくに終る留守居や九月尽



霧深き越後

秋川

泉

秋暑し小龜と歩く男あり
残暑をばものともせずに龜歩む
手のひらに皆既月食赤黒き
風も陽も強く強くて二百十日
芙蓉咲く神社詣でのお朔日
すすき原トンネルいでて広がれり
霧深き越後の郷の一軒家
魚沼の稻の広がり波を打ち
厳かに魚沼の里水澄めり
子らの面うつす鏡や秋の水



彼岸

七郎衛門吉保

再入院遠くにあれと曼珠沙華
重湯から再起の一歩吾亦紅
夕焼けを染める病室良薬に
薬より効果覗面秋の空

爺見舞ふスマホの孫の天高し
雷公の光も音も金属系

稻光りピカドンに似る怖さかな
星月夜無くウクライナ似てガザも
花言葉「再会」彼岸花妹と



秋

篠田純子

秋深し母の匂ひのサロンバス

あきあかね孫の彼女は美人とか

秋ともし御詠歌の衆どかどかと

地に坐して秋空見上ぐホームレス

薄ら開く目に秋の色ホームレス



休工

篠田大佳

秋暑なる風にわづかな秋を見る
秋雲や愛想笑ひはすぐ消えて
感動も秋思も言はな消えるもの
秋の蜂生きるばかりも芸のうち
足あとも消えて名無しの雲の秋
怒らせし肩は秋雨しううを受けにけり
晴害と風雨に耐へて木槿かな
秋彼岸墓前の花は間に合はせ
休工の夜にかすかに虫のこゑ



雜詠

須賀敏子

妹の弾む声して今年米

新米のいよいよ白く炊きあがる

秋夕焼け明日も静かな一日を

茨城や母の生家の次郎柿

緩く坂柿のなる家過ぎて橋

紫の皮に一筋アケビかな

若者と高原列車で初紅葉



秋收集

飛びし間に文様になる千鳥かな
産土に妹住みをり帰省かな
秋めくや今日の曜日を確かむる
ベランダに干し物少し鬼やんま
雑草をぬく地面見え嬉しかな
雜草に負けぬと伸びる百合の花
跣にて突堤まはり樂しみて
蓮華升磨まず天辺の玉ひらく
牧場に女棲みつく雲の峰
山中に河辺に廃墟桐の花
文鳥も吾も爪伸びてをり秋初め
蛇口より湯が出る日々や荔枝熟る

佐藤 竹僕
須賀敏子

長崎桂子

森なほ子

赤座典子



九十四歳穢吉敏子穴惑ひ

暑氣あたり地をはうごとく家事をする

秋川 泉

夏負けし赤鮫鱸になりにけり

うねうねと続く坂道せみしぐれ

しなやかに踊れ踊れと流れゆく

外へ行け！外へ行くな！と夏休

三歳の記憶忘るな敗戦忌

七郎衛門吉保

胡麻おはぎ一邊倒の父であり

篠田純子

トランジスタグラマーの祖母稻の花

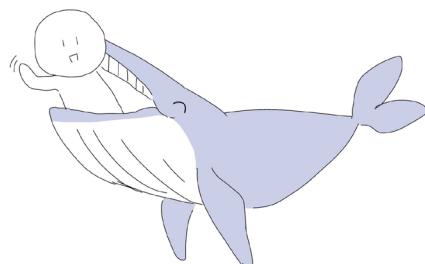
八月六日核戦争の水際で 篠田大佳

篠田大佳

秋はじめギャルは老婆に席ゆづる

八月尽明日も八月ならんかな

喜孝抄



九月号作品より

赤座典子・篠田大佳・佐藤喜孝

蟻の道みなすこやかな者ばかり

佐藤竹僕

蟻の道を作るアリは、働きアリに分類されます。外に出かけて餌を探すアリは、健康で丈夫なアリでなければならないのでしよう。こうした光景を見ると、列をなして働きに出る人間に重ねてしまいます。人間は、健康で丈夫でなければ働けない。少しでも健康でなくなつたら、社会から脱落してしまいます。求められる仕事の能力の高度化も加わって、人間として扱われる人間が僅かになつてしまい、人間が社会から弾き出されるのも時間の問題です。そういう疎外感に導かれるように読みました。（大佳）

どうもかうも合はぬ某國ところてん

佐藤竹僕

なるほど、思いを伝えるには、こういう句にすればよいのだと納得しました。常日頃我が家でも、某大統領がテレビに現れると、即チャンネルを変えます。作者の句は、今だけしか通用しないという句ではありません。そして、下五にさりげなく「ところてん」が来ました。こういう作句を、難しいですが挑戦したいです。（典子）

夕涼やかすかな鈴と影法師

篠田大佳

少し暮れ始めた、暑さもやつと一段落した景色を詠まれています。すべてが定かでない何処かで、かすかな鈴の音が聞こえています。まもなく、ほつそりとした人影が現れそうです。夢二の世界が、ふわりと浮んできました。（典子）

汽笛一聲月なき夏の常夜灯

篠田大佳

江戸から明治に時は移り浮世絵も小林清親の光線画がもてはやされた。なかに「新橋ステンション」といふ夜の駅前、番傘をさした人びとがたくさん描かれてゐる。間を人力車がゆく。人々も人力車も提げてゐる提灯の明かりが雨に濡れた路上に印象的に描かれてゐる。広重、歌麿などの浮世絵からよく新境地を得たものと感心する作品だ。

掲句を読むとなぜかこの浮世絵が思ひ浮かんだ。「鉄道唱歌」の歌いだしも「新橋ステンション」をすぐにおもふ。作者の意図は知らずとも、小林清親の版画と付かず離れずお洒落な一句になつた。（喜孝）

島へ行く船に並びて飛び魚よ

須賀敏子

昔々テントとザックを担いで、式根島に一週間出かけました。隣の新島への小さな船に沿つて、何匹ものトビウオがついて來たのですが、その飛ぶ距離の長さにびっくり！ 敏子さんのこの句で、昨日のことのようになに景色が蘇りました。（典子）

今 日 も 又 ゴジラ の 様 な 暑 さ か な

須賀 敏子

「酷暑・炎暑・極暑・激暑・厳暑・烈暑・熱暑・焦暑・溽暑・大暑・油照り・茹だるような暑さ・焼けつくような暑さ・「皮を脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだ」と」（「吾輩は猫である」・「粥のようになべねばした暑熱」（開高健「蒸し暑い夜」））Gemini に古今の暑さの表現を尋ねたらあるはあるは。でも数は漢語が多かつた。

なぜこんなことを調べたかといふと「ゴジラの様な暑さ」が暑さを表現するのにまさに的確。新し味もあり現代の私たちにはよくわかる譬へに感心した。そこでいにしへ人は暑気をいかに表現したのか知りたくなつた。といふことである。（喜孝）

離農して安けくなりし友の夏

長崎 桂子

農業に従事されていると、三六五日、様々なことを最優先でこなしていかねばなりません。その大変さから解放され、ゆつたりとした日々を迎えることが出来ました。そのお友達と、心置きなく夏を過ごせることになつた、作者の喜びも伝わってきます。（典子）

山並つらね水ゆたか稻げんき

長崎 桂子

住まはれる、いや日本中の山河の贊歌である。つまらぬ手管を使はない。畳み込むやうな手法

もみごと。爽快な詠みぶりである。稻ばかりではない私も元気になつた。（喜孝）

昔よりちょっと暑いと生身魂

森なほ子

高齢者と暮らしを共にすると、高齢者は夏でも体が冷えるらしく、暑さに鈍感になつていくようです。僕の祖父母は、夏でも炬燵を出していまして、冷房をつけていても、最大温度で窓を開けていました。それだけ暑さに鈍感になる高齢者でも、昔より少し暑いと感じる異常な暑さを作者はユーモアたっぷりに描いています。（大佳）

容赦なくドア開きけり冷房車

森なほ子

掲句に並んでなほ子さんは暑さに関はる句を何句か発表してゐる。「爆撃のトップニュースや暑」「右手に日傘左手にタオル入りバック」「汗拭ひペットボトルもふいてやる」「昔よりちょっと暑いと生身魂」とこの夏の暑さを詠んでゐる。今夏の暑さはなほ子さんにとっても相当厄へたやうで、多角的に詠まれてゐる。掲句はこの暑さに向かつて怒りをぶつけたいのだが、天候にはぶつけやうがない。電車の冷房車のドアが開くのにさへ怒りをぶつけられてゐるやうだ。八つ当たりだ。「容赦なく」は暑さへの無力感が伺えて面白かつた。（喜孝）

婿殿と同じ銘柄缶ビール

赤座典子

新たに家族になるお嬢さんがどんな人か、不安になつてているのだと想像します。いつも飲んでいる缶ビール銘柄が同じで、味の好みが近いことをきっかけにお嬢さんのことを探つていくという、親近感を持つツールとして、缶ビールが使われています。こういう細かい共通点が嬉しいですね。（大佳）

見舞ひ終ふバス停で浴ぶ蟬時雨

赤座典子

見舞ひの帰りはなんとも弾まない。典子さんの訪れた病院は緑の中に建つてゐるやう。療養には素晴らしい環境と思へる。訪れた人の元気な姿をみて安心するものの幾ばくかの不安を抱へながらバス停に立つ。「見舞ひして」と通常の表現ではなく「見舞ひ終ふ」とした。作者の身辺をおもふと「終ふ」に強い意志を覚へた。（喜孝）

自転車で追ひ追ひかけて遠花火

秋川 泉

何処からか聞こえてくる花火の音。かなり大きい音なので、見に行くことにしました。音のするほうへ自転車で向かいましたが、中々たどり着きません。行きついて、花火を鑑賞するまでにはたくさん自転車をこぎました。状況を表す中七の表現が面白かったです。昔の「E. T.」という映画での自転車が、空に昇つていくシエルエットを思い出しました。（典子）

回転するめまひ遠く蝉の声

秋川 泉

五七五ではなく九八のリズムで詠まれてゐる。さうすることにより流れるリズム感を断ち切迫感を得た。めまひは「回転性（ぐるぐる回る）」「前失神（卒倒感）」「ふらつき感（フワフワする）」などがあるといふ。括句の上五はなにもそのめまひの説明をしてゐるのではない。強調してゐるのである。蝉の声は実際であるかは判然としないが、めまひ中に聞こえたもの。めまひのときの長さが瞬時かさうではないのかは知らぬ。がその現象のさ中を「遠く」といふ言葉で吸ひ込まれてゆくやうな意識を見事に捉まえてゐる。（喜孝）

「退院です」に夏の朝早く明け

七郎衛門吉保

夏の朝は長いです。退院の朝を迎えた作者の、今にも飛び出しそうな勢いで帰り支度をしている様子が想像されます。退院の時間を待つ待ち遠しい気持ちが、入院期間の辛さと、病院を早く飛び出したい気持ちを読者の胸中に再現させます。（大佳）

粥飯と点滴が友夏休み

七郎衛門吉保

吉保さんの日ごろの作風をがらりと変へた今月の作品である。養生食や点滴を「友」といふ。そして病院の生活を「夏休み」と。精神の強さを知つた。「病室に蜘蛛動き出し庇ひけり」身边に

来た小動物、此処では蜘蛛。蠅取蜘蛛であらうか。元気な時は躊躇なく手で払つてゐたかもしけぬが今は「底ひけり」と優しく対処してゐる。盆踊の句・夏空無限大的句・ををしくも自身を帰還兵と。現実を素直に受け止め、そして前向きに捉えてをられる。易く出来ることではない。(喜孝)

朝富士や岩井の浜に地曳引く

篠田純子

昔、家族で岩井に旅行した時の句だと思います。作者は朝早くから活動して、地曳網体験をしていました。不精な家族が寝ている間も、作者は旅を楽しんでいるようです。壮大な富士山がうつすら見える朝の時間帯の海の気持ちよさを読みます。(大佳)

漁師より勤労対価の鰯二ひき

篠田純子

この句をみてすぐにはるか昔の一枚の写真を思ひだした。昭和三十年代のことである。漁師が地引網を曳いてゐるのを地元の嫗が見てゐる写真。もちろん黑白写真。掲句と違ひ本業の地引網である。私の前にゐる嫗は両手を隠すやうの腰に当ててゐる。その手の袋の中に魚が数匹入つてゐる。まだ数が足りないかのやうに地引網を見てゐる図である。まだまだ食糧事情が厳しかったのだろうか、いまだに分からない。

それに比して地引網を曳く楽しさとお土産の鰯を「勤労対価の鰯二ひき」とは。曳かせてもらひ楽しんだものを「勤労対価」と堅苦しい言葉に代へて楽しまれてゐる。(喜孝)

風花のをはるまでゐる淨瑠璃寺

佐藤竹僊

「奈良へ行かない」

と竹内弘子さんに誘はれた。二〇〇三年のことである。そのころ仕事が忙しかったので宿も何もかもお任せで新幹線に乗つた。宇都宮敦子さんが東京駅でチヨイスした駅弁を渡してくれた。今まで食べた駅弁の中でナンバーワンだと出足から好調な旅であつた。一行は六名、私のほかは顔見知りの俳句仲間の女性。中には今闘病中の渡邊京子さんもご一緒。

当日かどうかは忘れたが二月堂のお水取りに連れていかれた。知識のまつたく無いまま火の中に放りこまれた感じだつた。帰り道の濡れた躰の坂道。夢のやうな灯の中をゆく五人の後姿は映画のワンシーンのやうに記憶してゐる。

淨瑠璃寺では風花が舞ひはじめた。淨瑠璃寺での風花とは幸運すぎる。女性たちはまだ奥に見どころがあると行かれた。私は此処を離れがたく、門前の茶店で待つことに。懐かしい引戸の硝子戸越しに風花を見てゐた。お酒が無くなるころ女性陣ががやがやと帰つてきた。

季語あれこれ 「木の葉・落葉ほか」

「木の葉」と「落葉」といふ季語、同じものを指してゐて使ひ方が難しい。どちらがふさわしいか、どちらが正しいのかまよふ季語である。これが「枯葉」であればあまり迷はない。

『木の葉』

木の葉散る手のヒラヒラとピアノ鳴る	関口 ゆき
ゆつくりと光の中に木の葉散る	渡邊 京子
うつぶせの甕に木の葉のしぐれゐる	佐藤 竹僕
空が吐く木の葉冷たく血の激る	渡邊 友七
考える人の背中に木の葉降る	芝 尚子
日の中や木の葉舞ひ上ぐ仔犬かな	佐藤 恭子
木の葉雨いつ果てるともなく降れる	鎌倉喜久恵
すてられしもの起ち上る木の葉風	堀内 一郎
竹垣に色さまざまの木の葉散る	長崎 桂子
人が言ひさうかと思ふ散る木の葉	定権じょう
降りしきる木の葉に猫の顔をあげ	秋川 泉
秋川 泉	佐藤 なほ子
一枚の木の葉と埃日向水	竹僕 泉

『落葉』

落葉焚雲の行方を見てをりぬ	鈴木多枝子
法悦の限り落葉を盾として	柏森 定男
落葉道行きずりの人歴史説く	松本 米子
セロ弾にいつぱい詰まる朴落葉	佐藤 竹僕
抱擁のラストシーンに落葉舞ふ	柏森 定男
落葉風きのふは穴の上にをり	佐藤 恭子
落葉して子供の声の近づけり	佐藤 竹僕
大空の階下りてくる山毛櫸落葉	秋川 泉



掌にいちまいだけの朴落葉
恵み生む土へ還さむ落葉搔く
恍惚の美しき人落葉焚く
落葉踏む明るき音と暗き音
落葉して空の青きが広ごれり
落葉踏むひとりドナウの川ほとり
蜘蛛の罔に桜落葉がぶら下る
落葉踏む十八人のシンフォニー
落葉焚禁じられたる淋しさよ
面白きことなく散りし落葉かな
雨霽れて落葉の厚き栗林
棲みなれて行人親し落葉掃く
銀杏落葉ゴッホが脚をひきずり来
落葉襲ね長考に入る墓
雨の谿落葉の匂ひ身にまとひ
廢村の家に日溜り柿落葉
落葉掃く青いテントに住ふ人
被災地の少年落葉踏みしめる

佐藤赤座
鎌倉喜久恵
後藤志づ
山莊慶子
鈴木多枝子
柄森定男
須賀敏子
早崎泰江
芝尚子
泰江
早崎
中田
渡邊
竹内
田中
渡邊
木村茂登子
泰江
渡邊
友七
藤穂
弘子
藤穂
尚子
泰江
早崎
中田
渡邊
竹内
田中
渡邊
木村茂登子
泰江

小鳥の様に落葉舞ひ降り定まりぬ
落葉の上ざらに黄色のグラデーション
あせるまじ銀杏にはかに落葉して
移り来し落葉は移り往かぬもの
夕刊の届きしころの朴落葉
落葉径みんなで行けば恐くなし
幾そ度媼の笑みと落葉径
落葉焚く匂ひなつかし寺の町
落葉焚あついあついと諧を割る
甲高く鶴飛び立てり朴落葉
うしろから歩くたのしさ松落葉
落葉焚く煙は風の意のままに
落葉して甍あざやか永平寺
玉砂利や落葉浮かせし竹箒
落葉して三叉連ぬプラタナス
留石の奥へ落葉の彩重ね
落葉掃く箒の音の軽ろきかな

篠田 純子 芝宮須磨子
定梶じょう 堀内 一郎
赤座 典子 森 理和
森 芝 佐藤 恭子
赤座 長崎 尚子
森 佐藤 桂子
森 佐藤 尚子
森 佐藤 恭子
森 佐藤 泰江
森 佐藤 恭子
森 早崎 泰江
森 早崎 未
森 早崎 典子
森 理和
森 典子
森 泰江
森 森のりこ
早崎 泰江

落葉落葉地球がまるくなつてゆく

葉脈のまだづきづきと落葉かな

落葉して蓑あざやか永平寺

羽音たて尾長飛び立つ朴落葉

深々と落葉踏む音過ぎし日々

落葉ふむ山路語らず歩みけり

靴片方もうすぐ落葉に埋まりさう

落葉踏む足音従へ秋遍路

あうらより温かくなる落葉かな

氣むずかし風と取組む落葉掃

堀内 一郎

篠田 純子

早崎 泰江

早崎 泰江

渡邊 友七

東 亜 未

鎌倉喜久恵

竹内 弘子

東 亜 未

鎌倉喜久恵

竹内 弘子

東 亜 未

鎌倉喜久恵

竹内 弘子

東 亜 未

森山のりこ

森 理和

落葉掃坊主頭の竹箒

落葉踏む長き石段鐘楼へ

柿落葉碁盤の上に白と黒

落葉焚通りすがりが寄つてゆく

落葉掃く蜥蜴かくれてをりにけり

落葉焚小銃の音をさまりて

落葉して異國の人の竹箒

落葉焚焰の濃くうすく情にも

医師訪ふ心おもたく落葉踏む

落葉掃く夫小康の朝々に

大地まで身を震はせて落葉の虚

雨あがるそろりぞろりと落葉かな

すれ違ふ人や落葉の風を連れ

人影の見あたらねども落葉焚

駆けくらべ道草もする落葉かな

落葉焚出来ぬ法律落葉掃く

流れ速し泡と落葉の神田川

吹寄せの五色の落葉見入るのみ

東 亜 未

木村茂登子

芝 尚子

早崎 泰江

早崎 泰江

渡邊 友七

東 亜 未

佐藤 恭子

佐藤 尚子

佐藤 竹僕

長崎 桂子

長崎 桂子

篠田 純子

長崎 桂子

長崎 桂子

長崎 桂子

長崎 桂子

長崎 桂子



野良猫に突き縛はられ落葉道
一本の櫻大樹の落葉掃
落葉掃く頭上に鳥二三十

鍋島家墓所への標柿落葉

此の頃はしんがりに慣れ落葉踏む

戸惑ひはいまだ残りし落葉踏む

落葉掃き猫と話の出来る人

落葉踏む若き日の音戻らねど

参道を吹きぬけ落葉吹きたまり

一枚の落葉の音の日暮かな

落葉径こころ平静とり戻す

横穴古墳かがんで覗く落葉の香

カラオケの約束落葉おとたてて

閉ざされしままのシャツターラ落葉散る

落葉風左旋回国病める

あらそひのごとくあらそふ落葉かな

昇降機落葉を挟み下り来たり

落葉踏む猫にも老いの兆しあり

さざれ波ゆるる落葉に飛蝗をり

微睡は夏の落葉のなかにゐて

回向めくあしたゆうべの落葉焚

田中 藤穂

遠藤 実

長崎 桂子

芝 尚子

鈴木多枝子

芝宮須磨子

芝 尚子

早崎 泰江

篠田 純子

佐藤 恭子

吉成美代子

堀内 一郎

佐藤 恭子

篠田 純子

早崎 泰江

森 理和

佐藤 恭子

竹内 弘子

がま池の落葉もいちど裕子と行こつ
べつとりと隠しごとのやう濡れ落葉

江戸の坂櫻落葉のいましきり

温もりに魅せられて踏む落葉かな

日溜りに吹き溜りゐる落葉

温もりに魅せられて踏む落葉かな

笠地蔵蹤いてくるなり落葉道

落葉積む櫟林を没日かな

かさこそと落葉動かす雀たち

ぬれ落葉朝の光に輝きて

滑らぬやう歩く銀杏の落葉道

落葉積む堪へて育つか微生物

落葉掃く葉脈きれい自然界

落葉道まだ灯りゐる保育園

佐藤 恭子

大日向 幸江

長崎 桂子

篠田 純子

田中 藤穂

長崎 桂子

篠田 純子

田中 藤穂

長崎 桂子

長崎 桂子

田中 藤穂

長崎 桂子

田中 藤穂

早崎 泰江

早崎 泰江

森 理和

佐藤 恭子

竹内 弘子



主婦若し落葉掃きゐる身のこなし
落葉掃く晴れわたりゐて快き
落葉踏む心身解す響かな
退院をかみしめ歩く落葉道
男らの落葉に隠す鼠捕り
男らの二人一組落葉掃く
サンタめく落葉袋の五つ六つ
蝶のごと舞ひ散る落葉十字の碑
ニュートンも驚く軽さ舞ふ落葉
気温差に五日臥所や落葉道
「セザンヌ家」と路上に標識落葉道
百合の樹の落葉は猫の顔めける
武藏野のはけの庭園落葉踏む
塩原の白き流れの落葉かな
大き房踏めば彈力杉落葉
故里の鎮守の森の杉落葉
銀杏落葉裏表なく天に舞ふ
落葉舞ひコロナの街は人けなく

田中 藤穂
長崎 桂子
七郎衛門吉保
森 なほ子
森 なほ子
山莊 廉子
七郎衛門吉保
長崎 桂子
七郎衛門吉保
森 なほ子
須賀 敏子
須賀 敏子
森 なほ子
森 なほ子
大日向幸江
田中 藤穂

のびのびと三毛猫ごろり落葉かな
柿落葉桜落葉の坂下る
柘榴落葉日毎に庭の光増す
参道をからからと舞ふ落葉かな
落葉搔子がざるざると熊手かな
親子鹿落葉蹴散らし森の奥
ソオローオリ段差の見えぬ落葉道
ビル街も銀杏落葉コッホめく
よみがへる記憶の奥に落葉の香
道遠く黄落葉松の果てしなく
祖母の墓落葉時雨の只中に
登山靴ここは我が場所松落葉
空堀に落葉がうごく四日かな
満天星に紅を重ねて落葉かな
公園の片方に寄る落葉かな
どちらからともなき会話落葉の中
落葉して落葉の色の木のベンチ
坂八分来てふりむけばただ落葉

秋川 泉
赤座 典子
秋川 泉
森 なほ子
森 なほ子

枯葉

枯葉散るステンドグラスのマリア様
外つ国の人とかこまれ枯葉道

内藤 悅子
佐藤 恭子

森理和
典子
赤座

鎌倉喜久惠

早崎 泰江

吉成美代子
元集
卷之二

定尾じょう

佐藤
恭子

佐藤
恭子

佐藤
恭子

佐藤
恭子

佐藤
恭子

佐藤
恭子

堀内
一郎

諍ひに言葉還らず枯葉踏む
上むいて下むいて落つ枯葉かな
活氣よく枯葉搖さぶる尾長かな
散り騒ぐ枯葉をじつと乳呑児の
肩に触れたにとどまる枯葉かな
奔湍にまかす枯葉と雪客と
枯葉踏む枯葉が放つ陽の匂ひ
枯葉舞ふ鳥語日本語中国語
放たれて子犬が二匹枯葉鳴る
枯葉舞ふ千体地蔵の風車
枯葉舞ふ西空巨き星を揚ぐ
この先に狸の巣あり枯葉山



敷く枯葉踏む音樂し散歩かな

構はずに信号過ぎる枯葉かな
歳下の従兄弟を葬り枯葉踏む

枯葉色のコートで犬む従へて
珈琲を飲めば枯葉の音の中

カレー続き又今日もカレー枯葉色

小説の終りに近き枯葉道

カレー続き又今日もカレー枯葉色

枯葉敷く階鳩とのぼりゆく

空広し見渡す田畠踏む枯葉

歩くたびレッサーパンダの尾に枯葉
枯葉舞ふ沈黙深き修道院

枯葉舞ふ工事現場の回り道

今朝の雨枯葉ささやく別れかな

よく見れば終の枯葉は蓑虫なり

植物は冬になると冬越しの姿になる。昆虫も草木と同

じく冬に備へる。

長崎 桂子

長崎 桂子

森 理和

井上 石動

大日向 幸江

大日向 幸江

佐藤 恭子

佐森 理和

佐藤 恭子

森 なほ子

都築 繁子

長崎 桂子

篠田 純子

『冬の蝶』

一瞬の不安よぎりぬ冬の蝶
冬の蝶うしろ姿を見送りぬ

親しげに昼の窓辺に冬の蝶
業火にも隙間のありぬ冬の蝶

日の来たり金の冬蝶めまぐるし
羽閉ぢて地をゆらゆらと冬の蝶

ビニール片冬の蝶かと思ひけり
青空にとけてゆくなり冬の蝶

冬蝶の風に逆らふ事もなく
こめかみに青筋見ゆる冬の蝶

冬蝶となり舞ひ踊る石榴の葉
今朝の冬蝶のむくろの千代紙めぐ

大日向 幸江

佐藤 恭子

森 なほ子

都築 繁子

長崎 桂子

篠田 純子

早崎 泰江

佐藤 恭子

長崎 桂子

佐藤 竹僕

山荘 廉子

佐藤 恭子

大日向 幸江

佐藤 恭子

七郎衛門 吉保

篠田 純子

鎌倉喜久恵

鎌倉喜久恵

鈴木多枝子

田中 藤穂

凍蝶のしろがね色の白日夢

凍蝶のうすす目あけたるやうな午后

『枯 蟻 蟬』

枯 蟻 蟬 吹きとばされし生死かな
灯をともす足もとに居し枯 蟻 蟬
舞ひ込みし枯 蟻 蟬 に宿を貸す
ひと足が一步とならず枯 蟻 蟬
なによりも負けん気強し枯 蟻 蟬
あなどれぬ枯 蟻 蟬 の目の力

『冬 の 虫』

カクタスの葉裏に小さき冬の虫
冬の虫別れはうしろ振り向かず
コンビニエンスストア植込みの冬の虫

『綿 虫』

綿虫の山の眠りのなかに老い
綿虫や遠目するとき人の老ゆ
えぞしかよ綿虫が舞ひはじめたぞ
綿虫や切なき記憶捨つるべし

大日向幸江

佐藤 竹僕

綿虫を連れて鳥居を潜りけり
綿虫に出会ひし帰路となりにけり

綿虫のかくれしもとへ一步履む
綿虫や世になきものを恋ひわたる

芝 尚子

山莊 廉子

内藤 悅子

田中 藤穂

綿虫のふれたる水の面ざぎなみす
綿虫やなかりしごとくありしこと

定権じよう

東 亜 未

早崎 泰江

綿虫のひとつ泣きゐる茂辺地驛
綿虫かと聲を掛くれば消えにけり

田中 藤穂

竹内 弘子

大日向幸江

綿虫や空爆の報続きけり
綿虫にわれもまぎれてゆくやうな

佐藤 竹僕

竹内 弘子

鈴木多枝子

突然に綿虫ふはりベランダに
大量の綿虫飛びて今日は晴

須賀 敏子

篠田 純子

綿虫の只一匹を追ひかけて

須賀 敏子

渡邊 友七

後藤 志づ

綿虫の項の作品はなかなか面白かった。
特に田中藤穂さんの諸句に惹かれた。

(喜孝記)



あとがき

今月の表紙

神田川の聖橋から撮影した、地下鉄丸ノ内線の地上区間です。地下から一瞬だけ地上に出る瞬間をねらい、撮影スポットになっています。写真奥、昌平橋のあたりに、緑色のアーチ橋（松住町架道）が見えます。黄色い車輪の総武線が、ちょうど差し掛かっています。（撮影：不寛）

干柿

農家の自販機で渋柿を見つけた。うれしくなり自転車を止めた。干柿とともに小松菜、赤蕪も買った。手作りの干柿はなかなか美味。来年は渋柿を販占めやうとたらんである。蕪を酢漬けにしたりと結構楽しんでゐる。しかし味はおもふ通りにはいかない。

日高も水底に沈んで動かなくなつた。いよいよ本格的な冬に入つたやうだ。



タクシー

月に一度はタクシーを使ふ。今月もいつものやうに「GO タクシー」でタクシーを呼んだ。ドライバーは若い？女性で×2でシングルマザーでなどと話を聞いていたら電話が入つた。小学校からお子さんが怪我をしたらしい。大した怪我ではないので先生が様子を見ることが多い」と提案してくれた。東京駅が見えるあたりで途中停車してお堀の白鳥や黄葉を楽しませてもらつた。来月はどこで停車をしやうか楽しみが増えた。（喜孝）

一一〇一五年十一月号	発行日	十一月二十四日
	発行所	〒177-0042
		東京都練馬区下石神井一丁目六の三
		サンハイツ石神井2 一階
電 話	090 9828 4244	竹僕房
印刷・製本・レイアウト	カット／福井美佐子・ティリ エイマ	
会費	一五〇〇〇円（送料込）／一年	
ゆうちょ銀行（普）	（店番018）4586402	
佐藤 喜孝（サトウ ヨシタカ）		